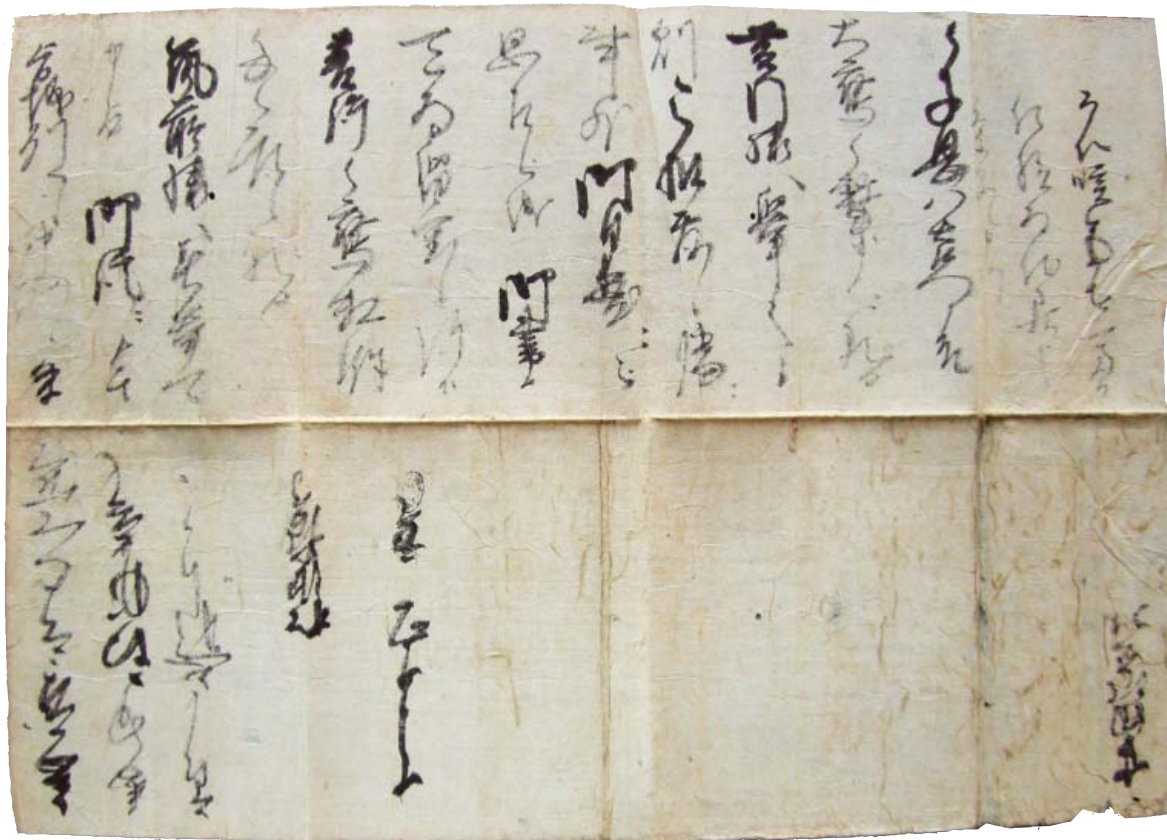


富山県 公文書館だより

第43号 2008・7・7



「利長へ献上の大鷹を利常に渡すにつき書状」(半田家文書)

大鷹献上(半田家文書)

半田家文書は富山藩士半田甚左衛門家(半田家分家)に伝蔵された史料群で、末孫の三重県在住の当主半田景康氏のご厚意により、平成七年八月付で、当館に寄贈されたものです。史料総数は計二百十点で、本史料はその一つです。半田家の元祖の次兵衛宛松平伯耆守康定の書状で、内容は、子息の八右衛門が、繋いでいた大鷹を黄門様(利長)へ献上したが、多数の鷹がいるので筑前様(利常)へ譲り、その旨城州(横山長知)へも申し入れるというものです。大鷹を献上した八右衛門について、加賀藩初期の侍帳では(馬廻組)二百五十石・越中とあり(慶長十七・十九寛永四年)、『富山藩士由緒書』に、瑞龍院様(利長)の慶長十七年(一六一二)四月十五日、亡父の遺知の内二百五十拾石を下され置き、御馬廻組に仰せ付けられ、……龍光院様(利次)富山へ御入城の砌、お供仕り罷り越し、承応三年(一六五四)病死と見えています。本書状はその内容から見て、前田利長が利常に譲って隠居した慶長十年代、八右衛門が父の遺知を分与される慶長十七年以前のものであろうと推定されます。

この大鷹献上に関する書状は、当館の今年度秋の特別企画展「越中の鷹狩り」に展示の予定です。(36cm×52cm)

アジアを襲った 災害に思う

館長 藤平 幹夫

前号の新年の挨拶で、次のようなことを述べました。「近年は中越地震や能登沖地震など自然災害が頻発しており、文化財の確実な管理はもろろのこと、我々の存在証明となる記録資料の保存に関して、入念な検討を始めなければならない」と。

その後五月に入って、大きな災害がアジアを襲いました。ミャンマーのサイクロン被害と中国の四川大地震がそれです。ことに、中国の四川大地震については、地震の規模がM七・八からM八に改訂され、その凄惨な様子は連日のように報じられました。地震国日本としても、これを対岸の火事とばかり見ているわけにはいきません。

これらの災害をうけて、政府の中央防災会議「東南海、南海地震等に関する専門委員会」が十四日災害想定を公表し、それをうけて、専門委員会は今年度中の、被害軽減策などを盛り込んだ「地震対策

大綱」を策定するといっています。さらに十六日には、政府の地震調査委員会は二〇〇二年にまとめた日本の主要活断層に対する長期評価を一部改訂、公表しました。そのうち当公文書館付近を走る呉羽山活断層について、今後三十年間にM七・二（阪神大震災規模）の地震が起きる確率を最大〇・六～一％の「やや可能性が高い」から、一～五％の「可能性が高い」に引き上げました。

ひるがえって、公文書館の役割と機能を考えますと、史資料の保存と活用はその根幹がありますが、地震大国といわれながら、ともすると平時時における保存と利用に意が用いられがちだといわざるを得ません。公文書館が基本的に文書・史資料の保存を目的としている限り、所属史資料に関する防災対策は、その重要項目にあげられるべきといえます。このアジアにおける大災害を機に、そのことを真剣に、より具体的に考えていく必要性を再度考えさせられます。



公文書館「出前展示」実施

当館の昨年度特別企画展に基づく「とやま二都物語―近代富山の都市形成と発展―」が、富山県立富山高専学校において六月三日（火）から七月十五日（火）まで開催されています。

この展示は、郷土富山の歴史を振り返り、理解を深める目的で昨年度に引き続き富山高校百周年記念館が企画されたものです。記念館企画展担当の方が、当館職員と展示パネルや史資料の借用・撮影について協議を行い、実現に至りました。

会場となった百周年記念館は、昭和六十年（一九八五）に創校百周年記念事業として建設された施設で、一階ギャラリーの陳列ケースには鉄道の発達と関連させた富山・高岡両市の都市形成に関する史資料（当館所蔵）が展示されました。壁面には展示パネルが掲げられ、半年ぶりに「とやま二都物語」の展示が再現されました。

六月二十三日（月）には当館主任森俊によるフロア・レクチャア

ーが行われました。一学期末考査が近い時期でしたが、高校生・教職員の方々が多数参加されました。学校などの施設における「出前展示」のご要望については、可能な限り協力いたしますので当館までご相談ください。また、このような展示が本館企画展参観への呼び水になればとも考えます。



富山高校百周年記念館における展示

富山県歴史資料保存利用機関連絡協議会

総会開催

去る五月二十九日（木）午後一時三十分より、富山県歴史資料保存利用機関連絡協議会（富史料協）の総会と講演会が、当館で開催され、総会には、四十五機関会員のうち、二十九機関三十八名が出席しました。

まず、会長である藤平幹夫当館館長の挨拶に始まり、引き続き藤平会長を議長に選出して議事に移りました。

議事では、平成十九年度の事業報告及び決算報告、平成二十年度の事業案及び予算案が審議され、いずれも承認されました。

昨年度から研修回数が二回に変更され、県外施設見学が三年に一度の実施となったことを受けて、今年度の研修内容など今後の事業運営について協議が行われました。このうち研修会は行政文書・歴史資料の両実務担当者研修とすることが了承されました。

また、来年度が役員改選の年にあたることから、第五期（平成二



富史料協総会

十一・二十二年度）役員について、平成十八年度に定められたローテーションに基づき、確認が行われました。

富史料協は設立から八年目を迎えました。昨年の能登沖地震や今年の四川大地震など各地で自然災害が頻発する昨今、地域史資料の現地保存には、一層の努力が求められるようになっていきます。今後研修などを通して、会員間の情報交換を進めていきたいと思ひます。

総会の講演会は富山県文化財室主幹の松島吉信氏をお迎えし、富山県の文化財と保護という観点からお話をしていただきました。

まず、我が国の文化財保護の歴史を文化財保護法の変遷を通じて語っていただきました。富山県の国宝は瑞龍寺の一件のみですが、全国各地で戦前の国宝をそのまま案内の看板などに掲げてあることをよく見かけるなどの話もありました。最近では里山など文化的景観という視点からも指定がされ、また宿場町・城下町などといった重要伝統的建造物群保存地区の指定も進んでいます。現在まさに富山県ではそれらの視点から高岡市と立山・黒部が世界遺産の登録に向けて運動している最中であり、そのコンセプトについても話していただきました。

歴史的資料の文化財指定についてどのような進められるか、またその保護の事例について、南砺市が最近行われた善徳寺の資料調査

「富史料協」総会講演会

文化財と歴史資料の今後について

富山県教育委員会生涯学習室・文化財室主幹 松島吉信

と石黒信由関係資料の修復事業について述べていただきました。指定については、南砺市が行われた専門員を中心とした歴史的調査による目録作成といった基礎的データを整えることがまずは大事であり、一点一点が大した資料でなくとも全体として重要な歴史的価値が認められるかが大事であるというお話でした。修復事業に関しては事前の細かなルール作りが大事で、それに基づいて国や県からの助成がされるという事でした。

松島吉信氏



歴史講座開講

多彩な講師陣をお招きし、富山の歴史を学ぶ講座として好評を博してきた歴史講座は、今年で二十二回目を迎えました。

三月の声を聞くころから「歴史講座受講者募集の受付はまだ？」といった問い合わせがあり、四月初めの受付開始とともに、申し込みが次々に寄せられました。結局、今年も早々に募集定員を上回りました。

五月八日（木）の第一回は開講式の後、前富山県文化財保護審議会会長の佐伯安一氏をお招きして、「近世砺波平野の開発と散村の展開」と題してご講義いただきました。

民俗学者として名高い佐伯氏は、



佐伯安一氏（第1回）

様々な自治体史の調査・執筆に携わられた蓄積をもとに、歴史地理学的研究の成果を惜しみなくご教示くださいました。氏は一向一揆で培われた力が、庄川の東遷により展開された近世の開発に寄与したと述べられ、開発の軌跡と散村の展開が重なることを、史料に基づく緻密な検証によりわかりやすく解説されました。

景観に注目が集まりがちな散村ですが、その本質は住居の周囲に経営対象となる耕地を持つことで、散村の実態をつかむには経営単位である農家の形態・規模、その変遷を把握することが重要とのご指摘に、受講者は何度もうなずきながら聴き入っておられました。

第二回は五月二十二日（木）、富山大学人文学部教授の黒崎直氏を講師に、「考古学からみた立山信仰―紀伊山地と比較して



黒崎直氏（第2回）

」と題してお話いただきました。黒崎氏は、北陸にある「立山」や「白山」と、世界遺産登録で話題となった「紀伊山地の霊場と参詣道」に含まれる霊山・霊場との平地からの眺望の違いを起点に、両地域の相違点を明らかにしつつ、山と人との関わりについて述べられました。特に信仰の場となっていたことを証明する宗教遺物の時代比定により、各々の霊山への信仰が形成された経過や、山岳信仰の場としての特徴について解説していただきました。豊富な写真画像を示してのお話に、身を乗り出すようにしておられる受講者のお姿が印象的でした。

六月五日（木）の第三回は、当

館の寺崎美希子史料調査員が講師となり、「越中の旅人たち―近世県内史料を中心に探る旅の様相―」と題して開催されました。

講義では、地図や年表、史料の写真画像を駆使し、ときに現在との対比を交えての説明がありました。特に近世庶民の旅行にかかる費用や日数、必要な手続きについての県内史料が紹介されたことで、越中を舞台にした旅の様子が浮き彫りになり、受講者にとっても過去の旅人たちが身近に感じられたようです。

この後の第四回は、六月十九日（木）に職藝学院の上野幸夫教授を講師に、「よみがえる千歳御殿―異例の遊び空間―」、第五回は七月三日（木）に樽谷雅好氏による「悪王子考―平安京からの使者―」と題する講義が行われました。



寺崎美希子氏（第3回）

平成二十年度第一回 古文書調査員会議

平成二十年度第一回古文書調査員会議が六月二十四日（火）に当館にて開かれました。古文書調査員の先生方には古文書の情報収集や所在調査、利用・保存指導等をしていただいています。昨年度から引き続き在任していただく十名の先生方とともに、今年度から新たに鈴木瑞麿氏と朝日淳氏に調査員として活動していただきます。

第一回会議では、まず当館から今年度の古文書実態調査の現況を報告しました。また、朝日町横尾の伊東家文書の現地調査結果と同文書が当館に寄贈された経緯等についてお知らせしました。

調査員名簿（敬称略・五十音順）

新川地区	清原為芳	永井宗聖
	安田良栄	酒井初江
富山地区	土井一修	平井雄子
	高嶋幸	鈴木瑞
高岡地区	仁ヶ竹亮	尾田武雄
	朝日	牧野淳潤

次に、各地区の古文書の状況について各調査員から報告を受けました。新川地区の清原調査員は松林寺所蔵文書、永井調査員は浄永寺所蔵の顕如上人真影と裏書、安田調査員は故石原与作氏所蔵文書と立山町寺田極楽寺村林氏文書について報告されました。富山地区の土井調査員は上市町石仏村岩城家の現状等、平井調査員は大沢野町消防団活動記録、酒井調査員は某家襖下張り文書の整理状況について情報提供されました。高岡地区の高嶋調査員は折橋家文書等の古文書整理の近況、鈴木調査員は水見市史編さん室収集資料の保存利用状況、仁ヶ竹調査員は高岡市立博物館の古文書整理状況等を発表されました。砺波地区の尾田調査員は千光寺書籍調査の近況、朝日調査員は前任の斎藤調査員からの引継ぎの様子を述べられました。その後の意見交換では旧家の古い襖の下張りに貴重な古文書が使われていることが話題にのぼり、廃

棄されがちな古い襖も貴重な資料であるとの意見が出されました。最後に、お互いに密に情報交換し、所蔵者のご意向を尊重する姿勢をもって古文書の保存に努めることを確認して閉会となりました。古文書についての相談や情報がありましたら、各調査員や当館にお気軽にお声をおかけください。



新任資料課長挨拶

谷沢 修

四月一日付けで、教職現場から当公文書館の資料課長に着任して、ばたばたと時が過ぎました。異動が決まり引き継ぎを行った段階では、聞いただけではどんなことをするのかイメージでできませんでしたが、これまで公文書館に知り合いもいませんでしたし、利用もさせてもらっていただけだったので、まあ何とかなるかと考えていました。でもやはり外から見るのとは大違いで、思いもしないいろいろな仕事 awaits ちかまえていました。歴史講座の開催、富山県歴史資料保存利用機関連絡協議会（富史料協）事務局として会計監査・理事会・総会、越中史壇会事務局、歴史文書目録の作成、県庁からの文書受け入れ等々。どの仕事ひとつとっても、充分理解が及ばない形で何とかやり過ごしているというのが現状です。さらには随時古文書レファレンス、古文書一〇番がはいってきてどぎまぎします。一日も早く公文書館に慣れていきたいと思っています。

明治天皇の巡幸と行在所

伊東家文書「行在所新築一巻」より

今年六月に寄贈されたばかりの伊東家文書から、明治十一年（一八七八）の明治天皇の北陸・東海巡幸の時に行在所に選ばれた伊東家の新築準備に関する史料を紹介いたします。当家は江戸時代に歴代十村を務めた家柄です。

天皇の行幸時の仮住居である行在所や小休所は各地の民家や学校、寺社などが充てられましたが、その中で最も多いのが旧家や富裕層の民家でした。富山県でもその多くが江戸時代から続く十村や豪農層の家が選ばれており、伊東家は巡幸一行が九月二十八日に越中へ入国して最初の行在所でした。

明治天皇の巡幸は明治五年から十八年まで六回行われており、北陸・東海は三回目にあたります。

この年の巡幸は大久保利通暗殺、近衛砲兵隊の反乱の直後という不穏な情勢の中で行われました。特に大久保を暗殺したのが石川県士族であったために、約四百人もの警察官が随行し、右大臣岩倉具視、筆頭参議大隈重信など供奉官とそ

の従者を含め総勢八百人という異例の行列でした（他の巡幸は百から三百人程）。

巡幸の目的は「人民の疾苦を問う」ことだったので、政府は人々の負担にならないように行在所や道路などの修築費用を最小限に抑えるよう指示しましたが、これだけの大行列を受け入れるためには県や各町村などにおいても多大の人手と経費を要しました。



行在所新築に掛った様々な材料費覚

行在所や小休所となる民家の修築準備も大変なものだったようです。伊東家では新築することを早くから決めていたようで、十一年三月に魚津町の大工加藤忠平に相談して四月には飛騨高山の材木問屋扇木勘兵衛から行在所造営用の

檜材や書院造作のための木材などを買い付けています。その大量の飛州木材は内国通運会社の船津、高山分社を通して富山三番町の氷見伝蔵の元へ運ばれ、東岩瀬から魚津の加藤へ届けられています。

その他にも、たくさんさんの建築資材や室内装飾用材、調度品などを各地から取り寄せていることがわかります。以下に主な物品の入手先をみてみましょう。

備後置表：越後国糸魚川

畳：富山旅籠町畳屋職玉川又作

金箔：金沢徒町森岡吉次

欄間：井波上新町番匠田村守貞

銅燭台：高岡小馬出町金森七郎

障子・雨戸：富山町津山良太郎

研石：市振の高橋幾松（積送り）

床の間飾り物：城端善徳寺

その他、羅紗洋服、極上靴や泊

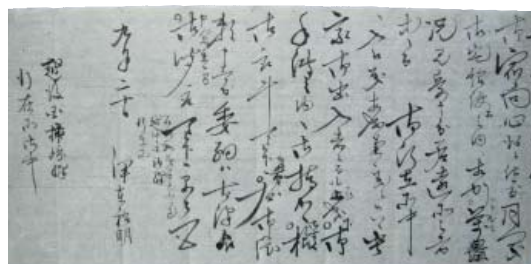
駅近辺に設置するガス灯などを注文しており、巡幸による欧風化の

地方への影響をうかがうことができます。

しかし、このような物品を容易に入手できたわけではなく、何度も仲買人を通じて催促したり、新築工事の遅れや嵩む経費を案じていたようです。

また、接待の仕方についても、先に宿泊される新潟県の高田行在所の様子を窺ったり、柿崎行在所へ伊東家縁者を給仕として直接送り込みたいと依頼しています。建物だけではなく料理や作法などにも細心の注意を払い、おそらく心労が絶えなかったことでしょう。

所の様子を窺ったり、柿崎行在所へ伊東家縁者を給仕として直接送り込みたいと依頼しています。建物だけではなく料理や作法などにも細心の注意を払い、おそらく心労が絶えなかったことでしょう。



柿崎行在所へ給使加入につき依頼状

そして、九月十五日に行在所落成、二十日に御成御門が出来上がり、二十八日の天皇御泊の務めを無事果たしました。

後に明治天皇聖蹟保存運動の中で、当家の行在所も昭和八年（一九三三）に史跡に指定されましたが、戦後に解除となります。現在は、遺構自体の価値から見直そうという動きが表れています。

なお当家文書の全体については、今後整理を進めていく予定です。

レファレンス・コーナー

Q

仏壇から髷^{まげ}を結った着物の五代前の先祖栄吉のガラス写真が出てきました。これはいつ頃撮られたものでしょうか？（富山市桃井町在住男性）

A ご質問の写真は、その形態から見て湿板ガラス写真です。これは、ガラス板にコロジオン溶液（乳剤）、硝酸銀溶液（感光剤）を塗布し湿った状態で撮影する写真で、わが国では安政年間（一八五四～六〇）、開港場を通じて導入されました（小沢健志『幕末 写真の時代』。この技法の導

入時期や、藩主や藩士が被写体となっているのが一八六〇年代に多いこと、被写体が髷姿であること、断髪脱刀勝手令発布が



明治四年（一八七二）であること等を考慮すると、この撮影年代は早く見積もっても一八七〇年代初頭と推定されます。未だ江戸の余香漂う頃です。あるいは断髪記念の写真かもしれません。椅子に腰掛け、植木鉢を置いた花台に左手を添える姿態は、写真屋により演出されたポーズでしょう。右手に持った煙草入れもなかなか粋です。ちなみに富山市最古の写真館は明治十七～十八年富山市総曲輪に創業の立花写真館で（大塚武雄『富山の写真館繁昌記』）、この写真撮影年代よりは時代が下ります。いずれにしろ、戦災をくぐり抜け現在まで残った貴重かつ珍しい資料といえましょう。



私と公文書館

元県史編纂室職員 久保 尚文

大卒時に県史中世担当嘱託、翌年教職より出向となった。元編纂準備室長木倉豊信氏ご逝去直後で、生涯をかけた収集史料集「中越史料カード」も閉ざされたご自宅に残り、参照できなかった。編纂事業自体が木倉氏依存であった。

編纂室には古代用『国史大系』新版があったが、中世関係はゼロ。『加賀藩史料』もなく、予算もなかった。『中越史料総覧稿』に戻って『大日本史料』以下をめくる作業から始め、既刊自治体史の引用史料を抜書きし、闇雲に筆写した。コピー機は編纂室になく、県立図書館機利用も単価高で、予算上、利用枚数は限られた。当時は同館未収蔵資料も多く、大学からも借りたが、古書店より購入してでも採録するようにした。

途中木倉カードの薄手印画紙焼付のCH写真を入手し、幾種類かの活字本との照合に帰宅後も追われた。自治体史記載で編纂室未採集の在地文書などは備品ペンタックス（後にニコン）とライトスタ

ンドを自家用空冷軽四に積んで撮影に出かけた。

『大山町史』掲載の旧太田保国人の子孫上野竹雄蔵文書を見たかった。編纂者I先生より八尾所在と教えられたが、役場で戦後Y市転住後消息不明と告げられ、探索不能。だが三〇年後に、元県広報係で旧知の赤羽一男氏より文書の親族宅伝存を教えられた。

館員と同道して所蔵者宅で拝見旧知の二点以外に、思いがけず未紹介天正六年文書軸を所持しておられた。戦国期以前の在地文書はきわめて乏しいが、新出文書は上杉謙信没後に早速進出してきた織田信長方と太田保国人の交渉を伝えていた。また同家が我が宅地の旧地主家一族の菩提寺であるJ寺の檀那と知って驚いた。

上野文書および立花京子氏とともに橋渡しさせてもらった木倉文書は公文書館に保管されている。残存点数の乏しい越中中世資料の新出を今も夢見ている。

■ 公文書館催し物案内

月 催事	4	5	6	7	8	9	10	11	12
歴史講座		5/ 8 (木) 5/22(木)	6/ 5 (木) 6/19(木)	7/3(木)	講師／佐伯 安一 氏・黒崎 直 氏 寺崎美希子 氏・上野 幸夫 氏 樽谷 雅好 氏				
古文書教室 入門コース			(募集) 7/30(水)～8/8(金)		8/28(木)	9/ 4 (木) 9/11(木) 9/18(木)			
古文書教室 初級コース				(募集) 10/1(水)～10/10(金)			10/23(木) 10/30(木)	11/ 6 (木) 11/13(木)	
展 示	常設展……テーマ「富山県の誕生と県政の動き」								
	特別企画展……テーマ「越中の鷹狩りー近世を中心にー」						9/26(金)～11/3(月)		
特別企画展 記念講演				講 師／湯浅 純孝 氏 テーマ／「鷹狩りに使われる鳥の生態」			10/2(木) 10:00～ 12:00		

※特別企画展中は土・日・祝日も展示室を公開します。

古文書の情報を
求めています

書庫や蔵の片すみで、人知れずほこりをかぶって、ひっそりと眠っている古文書はありませんか？
公文書館では、現在はありませんか？
見つめられることがない古い資料であつても、人々の活動を代弁する記録、人々の記憶が集積された貴重な財産として、将来に残していくためのお手伝いをしております。
古い資料の保管に関する相談、資料の内容についての相談など、お気軽に公文書館にお問い合わせください。

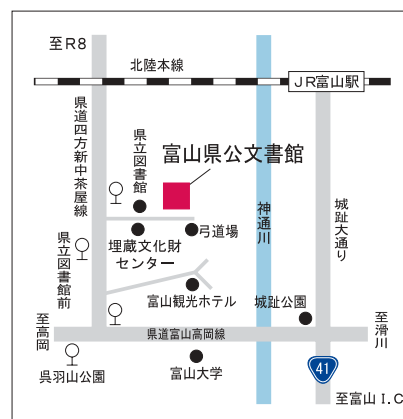
特別企画展のお知らせ

今年度の特別企画展は、近世越中の鷹狩りをテーマとしました。熊・猿の人里への出没や人身被害の頻発「北海道洞爺湖サミット」の開催など、近來環境問題への関心がとみに高まっています。本展示では藩政期の藩主の鷹狩りを、その職制・狩り場保全・農民との関わり等の面から館蔵資料を中心に展示し、人と自然とのあるべき関係を考える一助としてようとするものです。多くの方のご来館をお待ちしています。

(開催期間)

九月二十六日～十一月三日

利用案内



開館時間

月曜～金曜 午前九時～午後五時

休館日

土曜日、日曜日、国民の祝日・休日
年末・年始(12/28～1/4)

公文書館だより 第四十三号

平成二十年七月七日発行

編集・発行

富山県公文書館

〒九三〇〇一一五

富山市茶屋町三三二二

TEL 〇七六―四三三―四〇五〇

FAX 〇七六―四三三―四〇九三

ホームページ

<http://www.pref.toyama.jp/branches/1147/>